竹鼻仙右衛門著

心學道話

初編

全

特35
715

東京同文館

函架號
大日本教育會書籍館
一冊 一號 三架 七函
一 一 一 一

011792-001-7

特35-715

心学道話　初編，2編

竹鼻　仙右衛門／著

M14

AAF-0054

版権免許

明治十四年一月刻成

竹鼻仙右衛門著

心学道話 初篇 全

出版人 村上勘兵衛

特35
715

心学道話初篇

竹鼻僊翁著

扨今日。乃咄申まする。説教とヤのでなく。又ヤソ教でまく。心学道話と申まして。豈盛者の為よ。設ケました。のでいでざりませぬ。今日農業ハ。追日いされて。一反の歎を。学ぶもできぬ。百姓ハやら。職業ハ追まされて。本一冊。読むのない方〳〵へ。聖人の道あるさとを。ヤ咄申のでいでざります。道といなんぞ。乃い上下よなりと。古語ござりまして。釈からぞんまで。なりたるが。道でござります。古ふ。乃と言葉ハ迷ふるのかふれ。釈多おのゞるす業と云き

版權免許

明治十四年一月刻成

竹鼻仙右衛門著

心學道話 初篇 全

出版人 村上勘兵衛

特35
715

心学道話初篇

竹鼻儒翁著

扨今日は此中まちがいの。況教とヤのでなく。又ヤソ教でなく。心学道話と申まして。是盛者の為に設ケました。のでいでございません。今日農業ハ。追日衰ハされて。一家の費を。学ぶもできぬ。百姓方やら。職業ハ。追まされて。本一冊。読むのない方〳〵へ。聖人の道あるかとを。此中のでいでございます。道〳〵いなんぞ。乃い上下ハなりと。古語まで。ございまして。邪がらだんまで。なりたるのが。そこで。でございます。古ふり。乃ふ。言葉ハ迷ふるのかゝ。多おのゞ。るす業と云き

何とゆふことなのじゃ。此山天と云ふ。道の根元でござりまして。一切万物。此天より。生出ざるものはござりません。此天なるものゆへ。人間はやはり及ばぬ。高嶽草木叢林も。皆天の化したものじゃ。一切皆。天の一腹で。出来たものじゃ。主天とやはるとゆふまの上の事。おじやと。思ふてござるかもだぐりまちがふ。此泉のさきの家。ふ。耶天じゃ。主天をのんだりたくさんして。天が。性来してござる。主人筋を。息とやはてござります。仏家でゆ。此泉の出入りを。如来とやはてござります。此文字へ。如来ござる。ちたるが如しと。ゆんへまする。人のなかを。神とも。天とも。仏とも。やはまする。皆此天のゆでござります。上天のゆへ。色もなく。臭もなく。姿ちたなければも。天理とやはまのが。値ようてござりまして。苦報。恵よ恵報とゆふもゆるみはござりませぬ。主天よ成代ゆへ。世話やはるが。直よ　天子様でおぐります。何と。天下の法へ。ものがや。古家に。学ばるゆのうちは。誠こそ。義とゆふなりけり。何と。面白いかでござりませんか。人の心へ。正直なるが。生れつきでござりまする。人も。仁義礼智の性を。以てせずとゆふなし。ゆへ。なれまして。何方

なれば人の心は天より授かりてござる。山椒の先の小さい。
此天ゞ。孩の中へ往来してござる。そこを筋を長と名づけ。
この長のあるゆゑを。一生とこそ居る。長い人ばかりでござり
ますゆゑ。ゆるゆる。歌も出も。同じゆるでござります。歌。和を
でい。和物の重と。同体なゆると教てござる。何と結構な和
孫じゃ。和物の重じゃ。まじゃまじゃ。やはりそこの孫長
極い。親ゆきは。孝行なきれさので。御よ様より賞典
ゞ。あゆゆしと。まい結構なるゆじゃ。何をそこのゆる
長い。持重として。仕合い。人親しと。まい悪ひるゆと。
ようゆも。何とかんい。嫌なゆるのでいござりませゆる。人殺

去て。金を取たと。まい結構なるゆおやと。男の人い。
去人もござりますまい。左ふ。ゆるゆのうちの誠こそ。
義よりゆ。さとりなるけゆ。ゆゆしゆのじゃ。又親よ
孝行なるい。おゆゆまいのゆでござります。生あゆゆまいの
ゆを去てさい。御上様から。ゆ賞典を下し賜るとい。何と
御上様い。長悪海いゆのでいござりませんゆ。生上衛生と
ゆて。紙ゆ去ゆまで。先ねゆふ長命さしてやりたいと
の思ひで。家ゆを去ゆを兼よせよ。あゆを溜るな。法分用んせ
よと。のんまりあいたてないゆ世話。そりやがけ石ぎゆ。そりや
どろ泥ぎゆ。法行病よ付てもゆ。わんまりゆ世話ゆさると。生ゆ

ようひつじんて。若情をなくす。ようたいなるのおや。ひとつくおじあそごろくませ。にたい名板を。ゑ方からけづり。こ名板。千中よ採記して。資紙の患もなく。こ父の内飯い食。衣物い名る。ゑ者ようねまづ。仏と結搆なるゑ。たんのうさんとんがよいよ。まよまぐ足納をせびよ。仏のいのくいそ居る人い多獣ぎやと。聖人も仰らまきく。新かくらい人でも。んい畜生ぎや。孟子曰。人の道あるゑ。飽まで食いあるかよ名て。一居して。教なさ時い。舎獣よ近しと。仰らまきく。必びあをむいてをくはぎさい。天よをさかける事いできません。こる為かくて。我身の稼をなりまする。そこで孟子も自ゆづつて

而して后。人これをゆるると。仰らまきくあんまり向ふぎ名り足て。ぽんくくしていると。仕義ようい。人がねまりせゆゆふなりまする。ここんりの者ゆ。

我よきに人よあきがなるあろう。人はあさい。家がりきなり。

なの千本桜の芝居よ。狐忠信の云ふよ。桜のるを。狐名より枝をなりて。礼義を居ます。鳥い親の育を反をいるを狐が守て。ア名でさんもこを母りまいているんゆ。人の云ふよ通ぢ初のあるれを去る狐をゆまする。此をこるよいどこに居りまきる。ゆう者てごろくぢませ。人と生まれて。人の云祭よ法ぢ初のあるれ去りながく。人の左の勤ま

らぬものを。孤と申ます。扨よ稲荷様の神様。武足
居ります。主足い鍵を加へ。主足い玉と加へて。表へて
ござる。此神様へ。字賀の御霊と申て。天の御心の名で。
山天の御心と。鍵を以てどいと申ます。直よ御霊じゃ。
天地のせいろでむしあげてござるので。稲の先へ米と
云ものができます。夫で様とやい。世の根と申義
理で。こそ米よ。おのをくを。為の義。為の。シンニウ
を掛て。迷て居る幽霊いどいと。神。申て居ろ
うじます。大明神と。大よ明かな神じゃ。そこで天の御
霊と書て。あたまと読む。何でも此。おさまの中へ。天より

仁義禮智の性を。入きてござれがおそ。心い正直なものの
おやかしでもよいものを。すきが。心いてござらぬ。おしでも
うそをいくが。居。名ら我板の中に。沈金箔味りるく
おぼへがある。やうしくりのおや。古。有よ。
いつもも。人ふひてやみなきで。心のとろいが出てくん。
昔し周公と申聖人が。けるのまに心配なされた御いで。
是を思ひ。教り以て日よりつぎ。幸にして是を得ること。孟子
の傳よりへます。是いの友なれが。此人ばかりでも。
文王武王と云ゆうな。大聖人の如くよ。道を行ものが
できぬと。是教り以心配なされてござると。風と教の旅中

時分よ。内まがつさきしく。兄いがどふかきい。心のおりふ通りふしくら。本心性よきさがふのおやく。内悟りあるん たのしや。警へば。今晩い風が始く。裏の風呂の赤さの火の用んいと。本心の性べ。内分の面さなるくを。私心の分 長負。分陽よめが。まうよいなと落てしまふ。そこで 安堵が。出来ねのしや。まで教ごまよつひと。必ずすのめ やら。つさおとさくやうる。義をんます。やしくあしや。 性よきさがへばよりを。性よそむくへ逆ひだけ。学問 のを絶なす。主親心を求るのしや。何とは本心の性の 通りまへの。百年書物漢ざ人も。同じ

行が出ひがでます。まよやよつていづくが分なる者と いへども。志さへあまべ。本質のそよかなふとい。なんと あるでうひ。お楽しでばうます。一寸と休息

○先今日の有ごさいる。一ツくあるあてはうどまを。 一日初りじいめもせず。さもひいめもせば。面白こいわれた。 南夷さへ情出せば。のよよ孫記して。教ろへ蒲団さて。 ちよ政事の義で。盗賊強盗賊難の患もあくスリや ろうひで。はよ何う有ぞ。はよもなを。結こうな 異加よ。合ひしりしや。異加よういどこともなう。おとけ 下さる妻の名しや。その異加を考ばよいる。のく

かうまじゃ。ソコデ聖人も人の道あるや。あらと食ひあて
かよ者一居して教なさる時い。禽獸よ近しと。仰せまま
ちと。此結構な世界よ生まれ。て結構をちくびよ。何のかの
くくつて居る人い。ちく獸も同ぜじゃ。人面獸んといふ
て。顔かくちい人でも。人の道が勤まらぬ人。心い畜しやう
ぢやと。仰らまちと。見ぐ死んで畜生よ。生れかはるのと
いふやな。まどろくさいものぢやでざりません。其方
ち仰。心い畜生乃に。宿ぢいり去て居ることを。ぢ時めい
ぬされませ。さる先生のお性しよ。面白ありちなしがで
ざります。むう眼医者よ。名人がありまちと。是ハまち

ちやど物ひ上るで。病人がまいりますと。眼とも
ちるくと。目の玉を操出しあでありひ。暫時まづくと
たちち。鶏卵の白味でちぐ。病人の目よをめるところ
よくあるが。と物しい。医者どの。雪へ。さる眼病人が。見
てすちひよ。行きたソコデかの医者どの。ちの毒よ。
ちるくと操出しあでありい。ちもあしもいたむのなし。
緑先よ二ツとも。ぢくをたちしておちまちたら為
めぐポイト一ツ。加へて出さまちと。ソコデ医者どのも。面とく
ちれやたぐ。忽ち思ひ付んまちと。内のむく犬をぼで。
行目の玉をくるく。何と犬ハ迷惑千万じゃ。そして

又あでおろい。玉子の白味でそくぞ。彼患者の女眼へ。
もあこまれますと。彼の病人い。大よろこび。おかげで
やう見へまするとゝふて。礼を謝してかへりました。その
後。その人が。彼医者方へ。礼てきました。ソコデ彼医者方
が。何んもかゝとつさるのい。こぞうませんかといれました
たら。その人がなんもかゝるのいがぞうませぬと申
した。彼医者も。操かへ。何ぞかゝさるのがありそ
なものじやと。ぞれまたら。その人グソウおつしやると。
おしかとつさるのがみました。ぞうぞ。ちんまう。片
一方の目でんきたら。むさくろ者てくぞあり

ません。又ゝ一方の目で見ましたらこのもきてく
なりませなんだと言れました。何とおもしろい咄し
でいぞりませんゝこんなもんなるのもんぼも。あることで
ぞります。ぼろいの目ぼろいの人の目。何と味ひの
ある咄しでいぞりませんゝ。古ぶよ

人多き。人の中にも人ぞなきと人まれ人。人なせ人。
むの伊尹と中聖人が。天の氏民を生ぜる。先知先
て。後知をさとさとむと。作り生まして。人いみな氏天
より生ぜ付て下されて。此体身は意い。皆天の助用お
や。見真大師の和讃に曰。お好毎よ百ふの考りを。十方ふ

をなりてぞ。是は妙法蓮華経なるべし。此生を佛界に入る
志もること。云ふまでもなく。人の身の吹出す息いおひく
息は好。山月のまをあぐりたり。さりつたりすいつたりするは
妙。うだのすい法。まは皆日輪の光り。十方を照し
まふ。おなじく光りの即ち。山月のあるかたに。お月さまの
お光りの水晶。大日さまのお光りの土。のぞく孫のさ光
の風。なほ人は皆。体中の為。体中の火。体中の
風。地為火風色をなれば青い天。黄みは日なる。赤いは
火。白いは風。一天は海。妙法は体。体は体。ソコデ
なる人も。海より明らかなる。色を中といふ。明らかなる

より誠ある。是を義といふ。誠則ち明らかなり。明らか
なれば則誠なり。又中和を致して天地位し。万物育す。
何と結構な人と。生れたでいらっさりませんうそこで又
古人も。人くおのまを為さ者ありと。作られまして。大
てい結ってうな。身の上おやとよろこべい。極楽浄土かを
考へぬを地獄。そこでなるよ
たんのうとせねば。地ごくあれば極楽もなり
御代太平の恩を思ひ。何も是ろうと考へて。考さ
まや成ません。移相の徳の中よりそれ地獄さまを此世。
昭和の地界。悪鬼おこなし。何とおすろい言葉でい。

ござりませんう。足るものを去るね。そんをさして地獄。ソコデ年中。有ゞ上るまもほけいいくゞ火宅の苦しこと。為て。是を餓鬼。畜生への教も。佛の教と。天界も。國君も。みらね。是を畜生。是を三途の川と表てある。それで古来よ。鬼の所作。鬼のこを拵なゞ。人ごとに人こそ鬼。地獄恐ろしい地獄の中に居て。地ごくい分ませんなん。地ごくゞ見くゞ。一寸のぞいてゆろゞ。ゞまも。修羅先生のお活しよ。もう京の町のおきさくゞ合して。秋の比小山の方へ。麻の苧を吹ゆうきまして。弁当をどつさりと用意し。さる山寺のお座敷を借て。酒さかなを。

ふし月へせいくゝして。累色のけつうう名。さうづきを迎て。楽しもゞござる。まよトント麻の苧ゞ吹へません。ソコデ秋の十二時比まで。生しむで待ども。麻へなるねので大よ望を失ひ。山寺の夜具をかりて。みお休をゞ。ソコデ主人の人のやうに。私方へ。俳ゞごゞゞ。私の姿ゞみへませんと。直よ郎夜ひ。年く生ひ拵ませ主へ。けくなるのでござりません。美てん死で。定めて今比い。私ゞ品を拵るうして。るさて行ませ。とうと。主人の人ゞやうに。おまさのゆる長換ゞ。お生ひ拵ゞ比のへ。まへ笑んとそ者ゞや。

私しの父ハ。手代なるに老まます。折角隙なれうう大きう
して。けいしあるに会ふやうになりましたと。モウ主人のものを。
私に遣ひ果し。始末ハ宿預け。是まで困り入りますが。なる
たき身の内へ。血をかけさぬる様に。おつきこれなさるへまぎ
結構でござりますといふ。又壱人が進みをおいて。私ハまうし
何も不足ハござりません。母と家内とが不和で。毎日
くせつせつせいしまして。年中地獄の釜こゝげ。私ハ中に
立てつらふて。しし成ませんといふ。又壱人進み出て。私ハ
何も不足ハござりませんが。此頃ハ田舎ありのかけが。
のおりませんので。元ハ待てくれず。登り金ハなし。是

ふれ盆だら。困り入といふてずいさる。又壱人があくびをして。
縁先の便所へ出ましたら。山寺の庭先へ。大きな
鹿が一疋きて居りました。ソコデ其人も。此ような鹿が
居ぬのうか。なぜかうねおやろふと言ましたら。鹿めが。
ねのつね顔で。こゝしやおまへがたの鳴のを。妙に来さといひ
ますけな。何ともおすしろい。話しおやでござりませんか。だ
さきツの誠がないぞつかりに。けやうに苦しみ悩し。此地
獄ハ。七月十六日も休みなしおや。何と思しめす。無間の業まね
ごれがるし。是じやよつて。心学をお勤めやのでござりま
す。手島先生の前訓に。忽ち火のもえるへよれがあるつもり。

あのようへよまれべきものなり。泥の池へもまれべ。ずいぶん。風呂へ入きべ。垢おちて。きれいなるがごとし。然れども即ち若よ丈る。若よ立まれべかを入もして。若人となるよ粧ひあしと。乃明らめなさるべくひ。又今川の言葉まったい。あい方園の器りのふ陸ひ。人いぜん若恩の朋ことるとこ減ふるかなと云ハまったく。おやよりて。陸合藤日まへ成よ乃出席下さりませ。私ハ大の不学ゆへ。宮めてかくことばかり。ゆすでございますゆうが。乃不審の方もございますれど。おくへおのこうなきれて。乃成義なされて下さりませ。一寸と休ま

○昔より若根功徳の人よ。不和合を生じたる。人へ乃ざりません。君子ハ本を務む。本立て道なる。古人の言葉ちがひでございません。古言よさまくに。義ハあれど恩をあり若となすより外ハなきもの。何でも。若と陸るゞ仲要しや。お多い。長命富貴ゞ仕くべ。若根をおされます。強り縁の恵の恵。若根ハ自然よ俗なる酒をつ。私家をもけて。何とおすゝるみ今でございます。又初花の言葉よ。猫ゝさんへ。ふのあるへ。石塔のみよ若ゞふる。俗さむかくでゞ。ゞん若ゞ。ゞへ車よ乗て。異いこまひいいまゞ。おまへ

の言さへやるまでがりう。五文なぞや。嫌いぞやといふと。アレ女房よ礼がいるものう。まよ。女房い付りのじゃ。何と感ぜるるまでいでござりませんう。昔ひい歌付とりうるまでござりまして。三親兄弟が教されても。自らが歌うちよ出ねばかさ立て呉るるのがなりうこ。まよ引うへて。今日のみぐさひいと。立法法律をお立なされて。此度の日本出中ふ。王化の行届うね変なく。人を教せば直ち法律に照すとて。朝廷より歌を出て下されます。今此時に従うも。遠城恵左つも。石井長助も。佐倉恵ふるも出て来ましたら。大ようまでござりまうう。何とそなたのの

教ゆるとお承なされました。何でも歌さんあげれへ。世間へやかまきうへばそうません。まよ恵計りなげて。人のいとだかりとそつて。小言て居る人がありますのでござります。その毒かるまでやる。ひよ中がでございます。下京の辻君恵。大君のまで高法聖んで。さうとひりのでございます。是も先祖の宿迄入来られたいまぐ此るまでるぞや。家の親則ハ昔相ぞうう住てござる。此祖先の孫さんまで書物よ。立身虎の巻と。題号まで手紙をこんまでうう。此ハ君臣義あり。父子親あり。夫婦別あり長幼序

あり。明安信あるの。大主を。和〳〵かう。後〳〵。書でゞざり
ます。又鳥丸の方迄下る。飯田新七様。長坂高の兵衛。
是ゞ悔之浄く五倫の道の。正しい人でゞざりました。
先年の沙汰の後へ。善心栄。山貫長ゞ。お人ゞざりま
して。行末ゞ屋〳〵。南ひい毎月。主方国家の出怒昌。皆
先代の昔相ゞ。那〳〵ならんと。願〳〵る。又西門の
主人も。善兵の人にて。大丈夫の者ひを。お宅さなされ
たのゞや。行ゞゞ。善兵へ。孫兵人高実。栄の行衛
ゞ人い。善兵の心の生る。程。やゞたいるゝゞざりません。
又伏見御屋よ。荘の前と。ト家ゞゞざります。是へ主家

の主人。独か文右つ。招荘を。色〳〵。家の中よ。新十郎
所の菓をゝみ。主家の家円中へ。荘ゞ。の上肩の人へ
まで。止つて居ります。荘ゞ。さへ。かく。善兵を。抱されます
かゝへ。人りへかくやあんと。心易く。恐しと。思ております
たゝ。主家の大黒柱よ。国の如きの張紙あり。

堪忍大明神

是へ。何方ゞ。ゞ。ゞまたら。主人の日人い。後の方と
いゝゝゝへ。なゝ。善のゝゝゞ。ゞゞ。天命の性よ。後ゞたつゝ
迷ひゞゞ。主迷ひの。を。本途よ。ゝる。人の。ゞゞ。もし
月遠で。後ゞ立たら。口の中で。堪忍大明神〳〵と。三
度唱て後。おゝよ。向ひと。多くへ後の立といゝもおく。

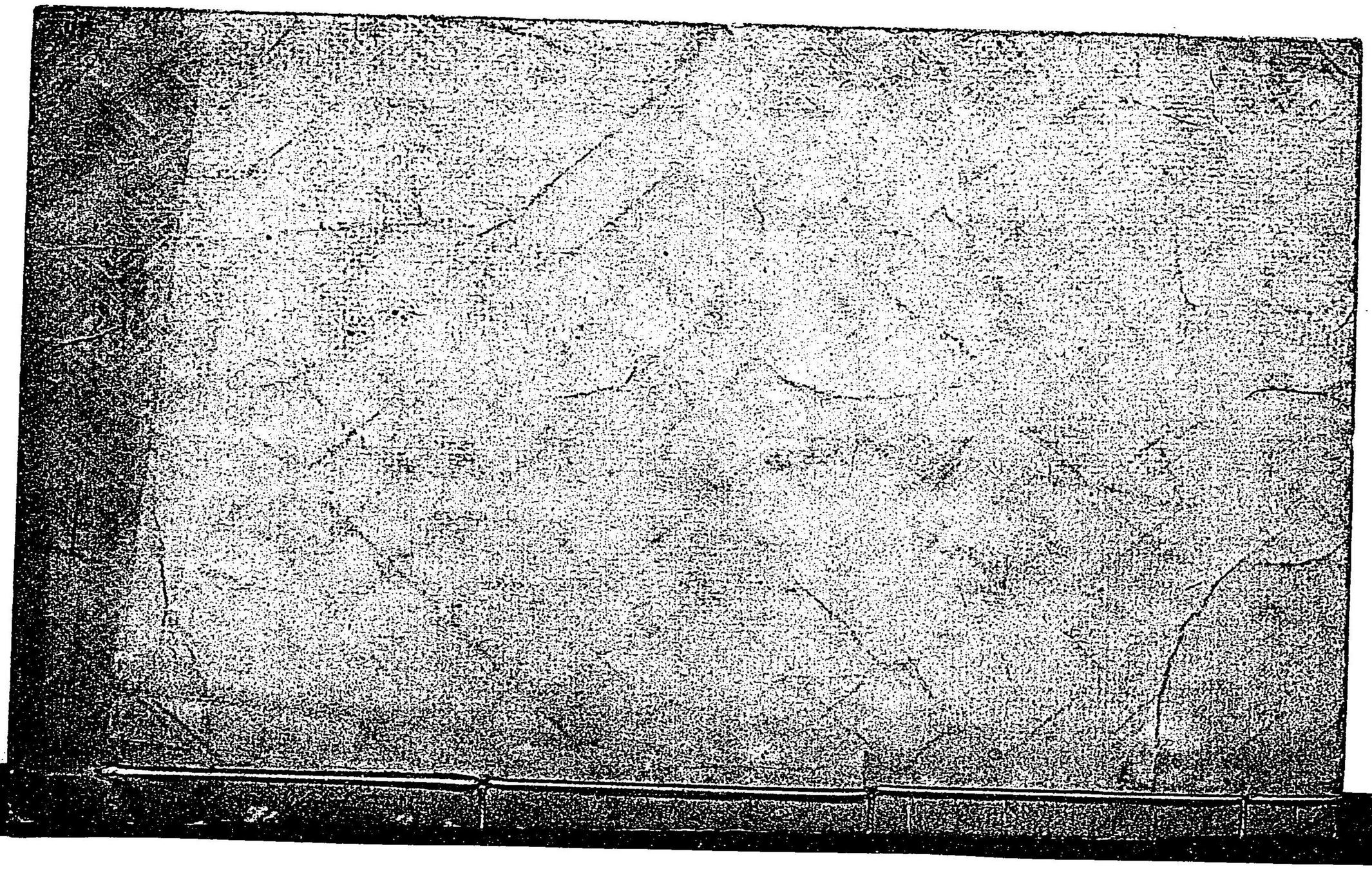
別してあるのゝふくれるとゝ病の起るとゝふるのなしと言きまし〻。又此代詮人が古淫文を以て。美之人をいぢめるとゝ云て。ゝゝが死ざ跡で山家より古淫文の沙あるのゝ。ゝのゝのゝのゝなるゝて。打角一代の苦ごんが。もゝになるゝて。ゝゝ長よお淫して。文ゝゝ反一代。貧窮人よ。ゝゝかへられゝる淫文。四十九通よ金ゝ千銭づゝ付て返されます〻。ゝゝと悪んゝる。悪苦の人でゝます。そこで老母が。九十ゝと老爺。文ゝゝ反が七十ゝ。ゝゝ長ゝゝゝ。ゝゝ十。孫が十ゝ。十ゝゝ。高夷ゝ悪昌。家内中ゝ年中よゝゝびゝゝ。ゝゝとゝゝゝゝひゝのでゝます。

ゝでも悪苦の人ゝゝ孫悪久高夷悪昌よゝゝびゝゝでゝりません。ゝよ聖人も。孫ゝ天のゝゝ。これを淫よゝるゝ。人のゝなりと。おゝ用なれます〻

尚孫ゝ口吸

明治十三年十一月十五日出版願
同　年十二月廿四日　版權御免許
同　十四年一月　刻成

定價金六錢

著者　京都府平民　竹鼻仙右衛門
上京區第三十三組新東洞院町二百八十番地

出版人　京都府平民　村上勘兵衛
上京區第廿一組曇華院前之町四百五十二番地